

「吉十郎きちじゅうろうさんなら、心配ない。」

「何をさせても、若いに似にあわず、しつかりしてるからなあ。」

と、こぞつて賛成さんせいしてくれました。

十五歳になったばかりの吉十郎にとって、これは、たいへんな役目でした。

肝煎きまひりというのは、村の責任者です。ほかの農民とちがって、苗字なまじを名なのることや刀をさすことが許されるのですが、一方では、村ぜんたいの年貢を納める責任もあり、村をひっぱっていくかしらでもあるのです。

吉十郎は、新城寺しんじょうじの和尚おしょうさんに、あいさつに行きました。

「新年、おめでどうございます。」

「やあ、おめでどう。」

和尚さんは、昔から吉十郎が、大のお気に入りでした。

「和尚さん、この度、親の代わりに、私が肝煎の役をつとめることになりま